【資料２】

【協議資料】

１　適正規模「１学年１学級以上を標準とする」ことについて

○視点１　地域における学校の役割

○地域に学校が存続する場合	○統廃合を行った場合
・地域コミュニティーの核としての機能 ※【参考資料２】：上毛新聞 ①防災拠点としての機能 ②保育機能 ③地域交流の場など ・令和６年度より市内すべての学校がコミュニティースクールとなる ・地域全体で子育てをしていくという考え方の醸成	・通学時間、通学距離が伸長する ・通学方法の確保（スクールバス等） ・バス通学になった場合、児童生徒の体力低下が懸念される ・環境が大きく変わったことによる児童生徒の内面ケアが必要 ・地域住民の防災・保育・地域交流の場の確保が必要 ・学校が無くなった後の地域活性化・高齢化が課題 ・廃校となった学校の跡地利用が課題

○視点２　小規模校のメリットとデメリットの観点から

観点	メリット	デメリット
人間関係等	○学級数が多いと人間関係が希薄化する可能性があるが、小規模の場合、互いを良く理解し、人間関係が深まる。 ○教員の目が行き届くため、児童生徒の関係性の変化に素早く気づくことができ、早期に対応することができる。 ○教員が意図的に活躍の場をつくることで関係性や相互評価の固定化を緩和し、新たな可能性を見出すことができる。 ○教員が児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などを把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる。	○児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい。 ・関係の悪化やいじめ等があった場合にクラス替えによって一時的に離す等の対応ができない。 ・勉強ができる子、運動が得意な子、おとなしい子など関係性や相互評価が固定化し、そこから抜け出すことが難しい。 ・児童生徒の関係性や相互評価の固定化などの対応が教員個々の力量に左右されやすい。

社会性	○授業や学校行事などあらゆる機会で意見や感想を発表できる機会が多くなる。 ○児童・生徒会や異年齢の縦割り活動など、様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる。 ○縦割り活動等により、低学年のうちから先輩の活躍する姿を見ているため、目標とする具体的な姿をイメージできる。	○大きな集団の中で自己主張をしたり、他者を尊重したりする経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につきにくい。 ○学習や進路選択の模範となる先輩の数が少ない。
学習・行事	○ＩＣＴを活用して学校同士をオンラインでつなぐことにより、協働的な学びを補償することができる。 ○一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が可能。 ○異年齢学習活動や教科横断的な学習など、特色あるカリキュラム編成が可能。 ○体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる。 ○外国語や実技指導等、少人数であることを活かした教育活動が可能。 ○地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい。 ○運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使える。 ○教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすい。例えば、ＩＣＴ機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能。	○協働的な学びの実現が困難となる。 ○多様な物の見方や考え方、表現の仕方に触れることが難しい。 ○切磋琢磨する環境の中で意欲や成長が引き出されにくい。 ○学級対抗などができないため、行事が盛り上がらない。 ○多様な学習形態により指導をすることが難しい。 ○体育の球技、音楽の合唱・合奏などの集団学習に支障が出る。 ○授業でその教科が得意な子に全体の考えが引っ張られることがある。 ○クラブや部活動の種類が限定され、自由に選択することができない。
教員数	○小学校の体育科や図工科、中学校の美術科、技術・家庭科などについては、地域ブロックごとの授業とすることで限られた教員数でも学習の質が維持できる。 ○小学校においても教科担当制を行うことで多面的な評価を行うことができる。 ○特別な支援を必要とする児童生徒にきめ細かな対応をすることができる。	○年齢や経験年数等を考慮した教員のバランスよい配置ができない。 ○1 人の教員の負担が増える。 ○免許外指導の可能性が出てくる。 ○多面的な評価の中で個性を伸ばすことが難しい。 ○１人の教員が担当する役割が増えるため、出張等が多くなる。 ○平日の年休取得がしにくくなる。

２　適正配置について

○視点１　通学時間（通学距離）の基準、通学方法

・通学時間・通学距離について

＜文科省基準＞

通学距離：小学校 4km 以内、中学校 6km 以内

通学時間：**1 時間を一応の目安として市町村が判断**

※適切な交通手段を確保し、遠距離通学のデメリットを一定程度解消する前提

＜アンケート結果＞　通学時間の限界（回答割合の多い順）

小学校　① 30 分　② 45 分　③ 15 分

中学校　① 30 分　② 45 分　③ 15 分

・通学方法について

小学校　主に徒歩

中学校　主に自転車

※遠距離通学の場合は、スクールバスの確保（車両・運転手）が必要。

○視点２　施設の目標使用年数

・笠懸小学校と大間々中学校の目標使用年数が近づいている。

笠懸小（残り 6 年）、大間々中（残り 7 年）

○視点３　学校区の見直し

・現在の状況

① 大間々南小学校　→　大間々中学校と大間々東中学校へ進学

大中：大東中　≒　２：３程度

例）卒業生 20 人の場合、大中 8 人、大東中 12 人程度

② 笠懸小学校　→　笠懸中学校と笠懸南中学校へ進学

笠中：笠南中　≒　１：３程度

例）卒業生 70 人の場合、笠中 17 人、笠南中 53 人程度

・１つの小学校から２つの中学校に別れて進学する問題を解消することについて

・学校区を見直す時期（学校の大規模改修や移転を含む建て替えの時に併せて見直す等）